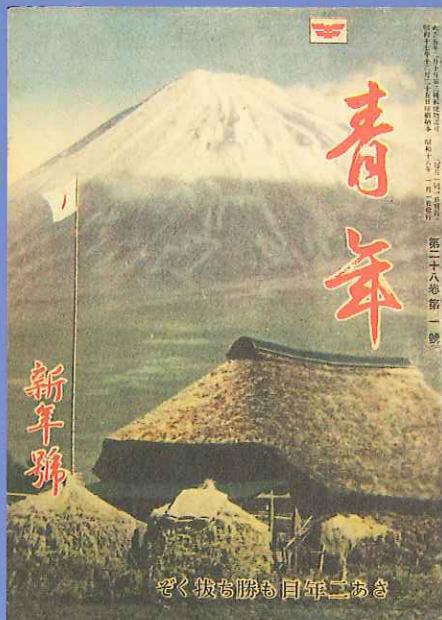


マイクロフィルム版

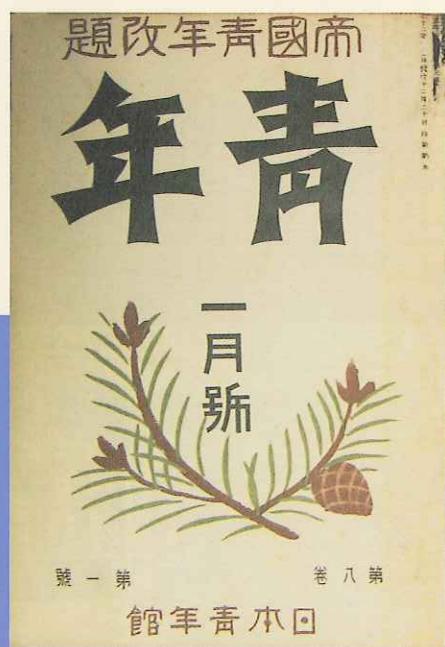
『帝國青年』『青年』

全48リール+別冊1

帝國青年 青年



不一出版



- 収録内容
- 「帝國青年」一九二六年(大正五年二月)～一九三二年(大正二年二月)
「青年」一九三三年(大正二年二月)～一九四五年(昭和二十年二月)
- 別冊||解説(多仁照廣)・総目次・執筆者索引
- 推薦||上野景三・小里貞利・菅原亮芳・渡邊洋子
- 配本||全2回(第1回=1906年七月・第2回=1907年一月)
- 定価||本体一、〇〇〇、〇〇〇円+税



『帝国青年』創刊号・表紙

日本の近代社会教育史の歩みを体現する、
50,000ページに及ぶ
青年団の中央機関誌を、
マイクロフィルム版にて刊行!

保存状態不良の号や僅かながら欠号や欠ページがある。

「田舎青年」から「地方青年」、「帝國青年」への歩みの解明

二三景

推薦

山本龍之助が『田舎青年』を著したのは、一八九六（明二九）年。それから十五年後の一九一一（明四四）年に「地方青年」の機関紙として『良民』が発刊され、『帝國青年』が発刊されるのが一九一六（大五）年のことである。その後、雑誌『青年』として、編集を日本青年館に引き継ぎ一九四五（昭二〇）年一月まで刊行された。

日本近代史における「田舎青年」の誕生から「地方青年」へ、そして『帝國青年』の登場は、そのまま日本の近代社会教育史の歩みそのものであった。日本の社会教育は、農村の青年指導・青年教育抜きには、成立をしなかつたといってよいであろう。日本の近代社会教育を解明しようとすれば、青年団の歴史研究を欠かすことはできなかつた。

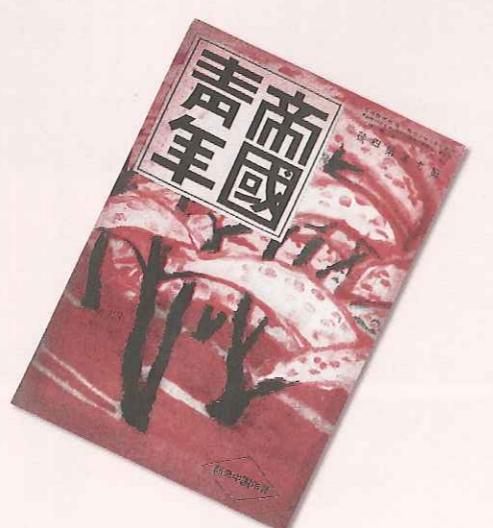
廢船利用

小里貞利 財団法人日本青年館理事長

雑誌『帝国青年』・『青年』の復刻にあたって

振り返りますと、日本で初めて全国誌といえる青年団の雑誌が刊行されたのが一九一二年（明治四四）二月の山本灑之助先生の『良民』でした。一九一六年（大正五）一月になると中央報徳会青年部が設立され、同年二月には青年団中央部として独立し『帝国青年』が刊行されます。一九二二年（大正一〇）九月に青年団の全国組織化の拠点として私どもの財團法人日本青年館が創設され、青年団中央部の機能は日本青年館に移管されます。日本青年館へ移管された雑誌『帝国青年』は『青年』に改題され地域青年団の機関誌として、広報誌として九〇年の糺余曲折を経て今日に至っています。わが国においてこのような雑誌は他に類をみないものと自負しております。

変喜ぶものです。これまで日本の青年団活動史料を唯一所蔵する当館へ、多くの青年教育研究者や歴史研究者、そして自治体史編纂の研究者が閲覧・利用に見えましたが、不便さを否めませんでした。しかし、今回の復刻により利便性が図られることはもちろんのこと、史料保存の觀点からも喜ぶべきものがあります。全国のあらゆる所で購入保存していただき、広く青年研究、青年教育研究が進むことを願うものです。ご存知のように青年たちを取り巻く社会的経済的環境は厳しく、全国の地域で活動する青年団や青年たちに元気を出してもらいたい地域のリーダーとして活躍してもらうためにもこの先人たちの貴重な活動史料が大いに参考になることは間違ひありません。



上野景三

5

げんだいせいかん。だん
えうきふ

留圖幸助



推薦
します

「田舎青年」から「地方青年」、「帝國青年」への歩みの解明

上野景三

佐賀大学文化教育学部教授

山本龍之助が『田舎青年』を著したのは、一八九六（明治二十九）年。それから十五年後の一九一（明治四十四）年に『地方青年』の機関紙として『良民』が発刊され、『帝國青年』が発刊されるのが一九一（大正五）年のことである。その後、雑誌『青年』として、編集を日本青年館に引き継ぎ一九四五（昭和二十）年二月まで刊行された。

日本近代史における『田舎青年』の誕生から『地方青年』へ、そして『帝國青年』の登場は、そのまま日本の近代社会教育史の歩みそのものであった。日本の社会教育は、農村の青年指導・青年教育抜きには、成立しなかつたといつてよいであろう。日本の近代社会教育を解明しようとすれば、青年団の歴史研究を欠かすことはできなかつた。



雑誌『帝國青年』・『青年』の復刻にあたって

小里貞利

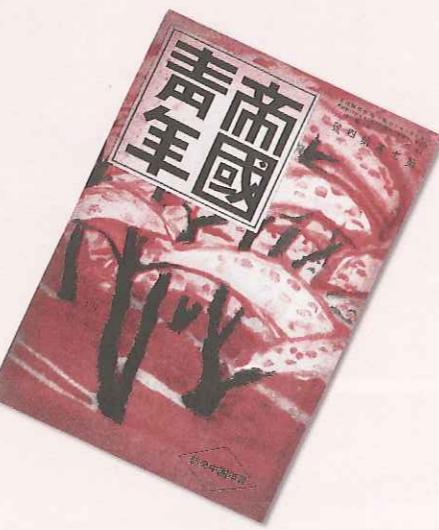
財団法人日本青年館理事長

振り返りますと、日本で初めて全国誌といえる青年団の雑誌が刊行されたのが一九一（明治四十四）年一月の山本龍之助先生の『良民』でした。一九一六年（大正五年）一月になると中央報徳会青年部が設立され、同年二月には青年団中央部として独立し『帝國青年』が刊行されます。一九二一年（大正二年）九月に青年団の全国組織化の拠点として私どもの財團法人日本青年館が創設され、青年団中央部の機能は日本青年館に移管されます。日本青年館へ移管された雑誌『帝國青年』は『青年』に改題され地域青年団の機関誌として、広報誌として九〇年の糸余曲折を経て今日に至っています。わが国においてこのような雑誌は他に類を見ないものと自負しております。

今回、これまで社会的に貴重な近代史料を数多く復刻出版してこられた不二出版よりマイクロフィルム出版として復刻されることを大

これまで、青年団研究の文献として、『山本龍之助全集』や『田澤義鋪選集』をはじめ、『大日本青年團史』『大日本青少年團史』『日本青年館70年史』が刊行され、『良民』も復刻されてきた。しかし、肝心の『帝國青年』と『青年』は簡単に読むことができなかつた。日本青年館の図書室に保存されていたものの、全巻揃つておらず、なかなかだ。その全巻の収集と復刻とが待ち望まれていた。

今回、『帝國青年』と『青年』のほぼ全巻が復刻されることが期待される。日本の社会教育学研究は原点に立ち戻りながら、青年教育研究の新しい扉を開くことができるであろう。



近代日本人の学びの構造を歴史的に検証する資料群

菅原亮芳

高崎商科大学流通情報学部教授

近代・現代教育史研究、なんんぞく近代日本教育情報史研究について教育関係諸雑誌が不可欠な史料であることを疑う人はいない。かつて僕は、仲間たちと長い年月を費やし研究者の利便に供すべく「教育関係雑誌目次集成」（一〇一卷）を編んだ。この「集成」の第三期に「人間形成と教育」という期名を付け、その網の中に躊躇することなく、この雑誌メディアを入れた。

たしかに『帝國青年』『青年』は、青年団の中央機関の広報誌的役割を担つた機関誌であつたかもしれない。しかし、この雑誌を縦いてみると、それだけでは意味尽くせないものがある。この雑誌を見つめれば、見つめるほど、雑誌に所載された名士や記者たちは、近代に生きた青年たちに情報を媒体として、彼らの学びたいという意志、生ずるわい学びへの「志」を喚起し、何らかの方向へキャナライズしようとしたりのようにみてとれる。中等教育あるいは高等教育の機会を開いた。

さて、若者たちに、この雑誌はいかなる学びの情報を取り扱い、どのように届け、いかに固定したのかあるいは否定したのか。青年たちが所与の世界で遠慮しながら、人生を選択し、自己を形成していく上での、今回マイクロ化される雑誌は豈かな素材を含んでいます。しかし、今回の復刻により利便性が図られることはもちろんのこと、史料保存の観点からも喜ばざるものがあります。全国のあらゆる所で購入保存していただき、広く青年研究、青年教育研究が進むことを願うものです。ご存知のように青年たちを取り巻く社会的経済的環境は厳しく、全国の地域で活動する青年団や青年たちに元気を出していくもろい地域のリーダーとして活躍してもらいためにもこの先人たちの貴重な活動史料が大いに参考になることは間違ひありません。多くの方々に活用していただくことを願うものです。

「異性の眼」による青年指導から合同活動へ

渡邊洋子

京都大学大学院教育学研究科助教授

一九一〇年代末のある日、二人の男が肩を並べカメラの前に腰を下ろした。一人は青年団指導者の山本龍之助、もう一人が処女会中央部（後の大日本連合女子青年団）の設立に尽力した内務省嘱託天野藤男である。残念ながらこの写真は現存しないが、山本は撮影時「青年団の父と処女会の父」の記念写真だと豪語していたという。

天野は静岡から上京し、『帝國青年』誌で「優良青年団巡り」欄などを担当、また『都市及農村』誌主幹として「田園趣味」論を展開した。数年後、「農村の良妻賢母」（「勤妻健母」）養成機関としての処女会構想を唱えたが、それは「異性の眼」による効果的な青年指導を意図するものでもあった。大正デモクラシー下の建前と本音の分离で、指導者は青年心理研究を求められるようになつて行った。「異性

の眼」による指導という発想は、山本の持論とも見られる。天野は

一九一八年（大正七年）年、第一線の女子教育家と内務省・文部省関係者を集めて中央部を設立し、機関誌『処女の友』を創刊、その全国組織化に邁進した。青年団と処女会の合同活動「雁行」を奨励した天野の遺志は、編著『青年団及処女会』『改造と向上』青年と処女の叫びなどに反映され、引き継がれた。

ここに『帝國青年』『青年』マイクロ版が復刻され、青年団の記録とそこに垣間見える青年たちの「叫び」が「史料」として整備されたりことを、処女会研究の一端を担う者として心から慶びたい。誌面から浮かび上がる、時代に翻弄された青年たちの軌跡が、読む度に様々な問いを投げかけてくれるだろう。



関連図書のご案内

山本龍之助＝編〔明治44年・大正8年刊〕
良民 全9巻・別冊1

雑誌「良民」は、編集を山本龍之助、挿絵を竹久夢二、そして出版元を河本亀之助の三人によって、明治四四年二月に創刊された。「地方青年」であつた三人は、「大正デモクラシー」の生成期の時代相をとらえ、今日おいてもなお、近代日本の青年・壯年層の形成過程を知る貴重な資料を提供している。山本龍之助日記（全四巻）の編者の解説を付し、広島県沼隈郡の山本家に残る唯一の原本をもとに、本書は復刻された。教育史、特に近代社会教育史の資料である。

- 別冊＝解説 多仁照廣・総目次
- A5判・上製・総4・356頁
- 本体価格1,500,000円+税
- 98年10月刊〔復刻版〕
- 推薦 大演徹也・小川利夫・金原左門

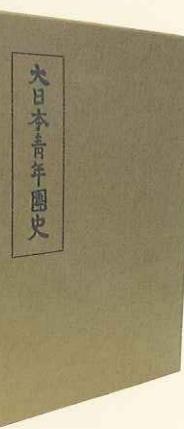
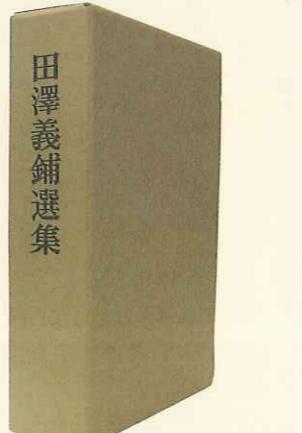
壯年團 全7巻・別冊1

一九三〇年代、昭和恐慌や経済更正運動のなかで壮年層の役割が注目されると、壮年団の運動も本格的になり、全国各地に続々と壮年団が結成された。内務官僚の指導下に、反社会主義、反・非政黨、郷土愛を掲げた壮年団運動は、当時の国民総合路線の一翼を成した。機関誌「壯年團」は、各地壮年団の動向、指導者田澤義鋪、丸山鶴吉、後藤隆之助らの論説、昭和研究会に關係した尾崎秀美、笠信太郎、蠍山政道らの評論などを掲載した。

- 別冊＝解説 北河賛三・総目次・索引
- A5・B6判・上製・函入・総5・152頁
- 本体価格9,800円+税
- 85年11月刊〔復刻版〕
- 推薦 伊藤 隆・今井清一・由井正臣・友野勝郎

山本龍之助全集
（財）日本青年館＝発行〔昭和6年刊〕 岡田洋司＝解題
近代日本の青年・壯年層の社会教育の上で、重要な役割を果たした山本龍之助（八七三～一九三二）の著作・論文のエッセンスの集大成。近代日本農村青年の自己形成史を知る上で貴重な書である。

- A5判・上製・函入・1・220頁
- 本体価格20,000円+税
- 85年12月刊〔復刻版〕
- 89年6月刊〔復刻版〕



（財）日本青年館＝発行〔取扱図書〕
大日本青年團史

戦前の青少年団の活動記録は、昭和二六年までを「大日本青年團史」に詳しく述べ、昭和二七年から二〇年までは「大日本青少年團史」にまとめられた。本書は、昭和二七年に日本の青年団の歴史を初めて体系づけた唯一のものである。内容は、江戸時代初期の若連中から説きおこし、大正期の大日本連合青年団の統一、大日本青年団として昭和二六年の大日本青少年団へ再編成する前までの記録している。

- A5判・上製・函入・総776頁
- 本体価格14,000円+税
- 89年6月刊〔復刻版〕

戦前の青少年団の活動記録は、昭和二六年までを「大日本青年團史」に詳しく述べ、昭和二七年から二〇年までは「大日本青少年團史」にまとめられた。本書は、昭和二七年に日本の青年団の歴史を初めて体系づけた唯一のものである。内容は、江戸時代初期の若連中から説きおこし、大正期の大日本連合青年団の統一、大日本青年団として昭和二六年の大日本青少年団へ再編成する前までの記録している。

- A5判・上製・函入・総1,072頁
- 本体価格18,000円+税
- 96年4月刊〔復刻版〕

戦時の後方援護、食糧増産、民間防衛などに従事、敗戦までの国家経力戦体制にまきこまれていく過程を記録している。

少年団連盟（ボーイスカウト・帝国少年団協会の四団体が統合され「大日本青少年団」が結成された。その数一千五百万の青少年が組織され、戦時下の後方援護、食糧増産、民間防衛などに従事、敗戦までの国家経力戦体制にまきこまれていく過程を記録している。

日本青少年団が組織され、戦時下の後方援護、食糧増産、民間防衛などに従事、敗戦までの国家経力戦体制にまきこまれていく過程を記録している。

少年団連盟（ボーイスカウト・帝国少年団協会の四団体が統合され「大日本青少年団」が結成された。その数一千五百万の青少年が組織され、戦時下の後方援護、食糧増産、民間防衛などに従事、敗戦までの国家経力戦体制にまきこまれていく過程を記録している。